

カメンスキ教授を悼む

進 士 晃*

畏友、レニングラードの理論天文学研究所のアバキニン氏から、ワルソーのカメンスキ教授が本年4月19日、93才で逝去された旨、通知を受けた。御高齢ではあるし、最近はかなりお弱りになっておられると聞いていたものの、この報に接し、誠に哀惜の念に耐えない。

ミカエル・カメンスキ Michael Kamiński 教授は1879年11月帝政ロシアのウクライナのモギレフ公国に生れた。ブルコバ天文台に在職の後、1914年ウラジオストック天文台長となった。当時、日本の水路部では麻布原点の経度を再測する事業が始められており、(本誌7月号「原点めぐり」参照)、中野徳郎はグム島における東京との経度差観測に引続き、1916年11~12月、ウラジオストック天文台で長崎との経度差の観測を行なった。このときカメンスキ台長は、中野の観測を全面的に援助し、またグリニジからポツダム・ブルコバ経由で決定したウラジオストックの経度に関する詳しい資料を提供した。

1919年4月、水路部に編暦課が創設されたが、その翌年5月、教授は革命によってウラジオストックを去り、日本に亡命し水路部の囑託となった。すべてが始めての仕事ばかりという当時の編暦課にとって、位置天文学のベテランである教授の存在は、非常に心強いものであったに違いない。

教授は水路部で、Zingerの方法による時刻決定用の表を作成し、これは Bull. Hydrogr. Dept. Vol. III (1922) として刊行され、つづいて Piewcowの方法による緯度決定用の表を計算し、中野課長へ提出してポーランドへ向った。これは原稿のまま翌年の関東大震災で焼失した。

1923年、ワルソー大学教授・ワルソー天文台長となり、第一次大戦で荒廃した天文台の復興に当たった。この間、さきに焼失した Piewcow 法による緯度表の再計算を行ない、1930~35年にその全5巻をワルソー天文台から出版した。教授の業績として代表的なものは、ウォルフ彗星の軌道解析であって、電子計算機のない当時、惑星による摂動を丹念に計算して、遂にこの彗星の運動に永年減速のあることを発見した。これは彗星の運動におけるいわゆる非重力項の存在を確認した最初である。

第2次大戦末期にワルソー天文台は兵火に遭い、構内

に住んでいた教授は研究上の諸資料をはじめ公的・私的なもの一切を失なった。日本から持って帰った数々の思い出の品もすべて烏有に帰したのである。

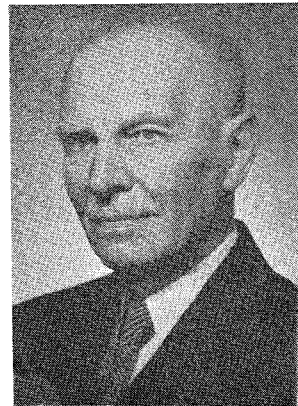
戦後、しばらくはクラカウ天文台に居られ、隠退後も科学アカデミー会員、イギリス王立天文学会名誉会員等として、ポーランド天文学の大御所たる存在であり、ワルソーで悠々自適の生活を送られ、90才の誕生日にはイギリスのエリザベス女王から祝辞を贈られた。

教授は大変な日本びいきであり、よく「敷島の大和心を……」の歌を引用しておられたが、これは在日当時の中野徳郎との家族ぐるみの親交によるところが多い。帰国後すぐにワルソー大学に日本語講座を起こし、また日本・ポーランド協会を設立して自らその理事長となった。夫人をいつも日本語で「マリさん」と呼んでいたことは、東欧の天文学者の間ではよく知られている。東京で迷い犬を拾って飼い、ワルソーへ連れて帰られたが、その名は「イヌ」であった。つぎの須川さんの訪問記に引用されている論文は、教授の最後の労作と思われるが、これも日本天皇の宇宙人仮説である。

ここに、カメンスキ教授の水路部への御貢献と日本への御好意に対し、あらためて厚く感謝するとともに、御冥福を衷心から祈念する次第である。

なお、水路部の資料によれば、ウラジオストック時代および水路部時代には、教授の姓の綴りは Kamensky、仮字ではカメンスキである。ここでは、これに従った。

カメンスキ



カメンスキ教授とその署名

* 水路部